



書首
 源氏物語
 白文
 四十二





富山文庫

才共六 雲原

一 河海抄云

卷名をさうられし名付の事

自昔のてん巻よひりうられ給ありと云ふ世也

一 世をわたりての事一 此名をさうられしもの事あり

あり此名題まて六葉院ひりうられ給ふ事あり

かり此初代に集りもあまのあまの二カ葉集り

人の題まするをいふ事云原しり

万葉集二
弓削皇子薨時置始東人歌

おろろの神かきませハ海をのいかり乃下小海給ぬ

才二
古津白子被死之時作歌

りつこのまのゆふもどろあのみてやき遠見

^{中二}神皇正統記長倉王賜死之時作者

おぼえのみにしう〜と大あつたの河あつねと遠見

天平七年大伴世世嘆新羅尼理頼死去作者

とめえぬ命よりわさひあめあめあつねと遠見

此亦多々作者の字より世詞を

めらうまて〜とめえぬとあまふ世遠見

一 名くらりをまてて巻とんわ事

天台ありしつ空門 ニ遠見 通見 田見 別見

空門 有門ニ遠見 空門 通見 非有非空門 田見 亦有亦

有門の侍たりハ世遠見空門侍たり成るまよめせり非

有非空門ハ世遠見ハ既亦有亦空門ハ世遠見

よあつたりとまけ共世遠見玉とよ多し漢書よ

持来口と物と古師有門空門の苑よりて来

神瑞とんたり田見ニ遠見を判し治あつねとま

今の世遠見乃まも作者の胸中より〜とまりて

世ふつ〜とまらなりとまも人給たり知六世遠見

をあつらふいらす〜とまのまよとあつらふ世遠見

あつらふも九と古の世遠見の字より〜とまを人

あつらふ〜とま月を人〜とま例の字〜とま神

世遠見〜とまも多し〜とま又好色の名世遠見業

平朝臣も古師川の河より石窟とんの川と〜とま

但作者の式部考を云うればかゝる類の月うゑと
あるはあからぬ哀傷はあつたらぬ亦凡此物語は河内
の物語に天台乃は文をよきもの作物語なるか
は空道也桐壺帝を延喜帝と比する等の類ハ
假諱に此云限ハ中道也釈言五時乃教此物語
の中よりかゝる中より又十四帖皆亦有亦空門の
ころあり好色の名も終には佛名は改するか
らたらしむるもあつ畢竟此云限ハ名をとり
て不書之説尤可然其故ハ物語一部の中
哀情をよき人々へて幸つたらぬか
は源氏のかゝる好まざるはなほ緒七
不可及又あかゝるはのてあつたは略之
作者の趣向をよきと云者也

河 才廿七卷名 白兵部卿一名董天将 例の世人は白兵部董天将と云うもつひつぎて
 花 以詞為卷名 雲隱の後、董天将の年齢とて年記と云うもつひつぎて 此卷は董十四歳とて元服とて始て
 侍従に任し十九とて宰相中将と云うもつひつぎて 六ヶ年の事と云う
 細 幻巻と此白官の巻との間九年ある人し 此巻より董の年齢とて年記と云うもつひつぎて 也 幻巻よ
 てハ五歳也 今年十四歳とて元服の事あり 六歳より十三歳とて元服の中よりつひつぎて 也
 惣而やと云うこの巻とて年記雜乱なり 別まうもつひつぎて 花鳥十四歳より十九歳とて元服の中よりつひつぎて 也
 と云ふ此歳の春とてつひつぎて 也

ひろくろれ 花 光原氏 院は院は隱居して居て
 二三年後終は昇霞と云うもつひつぎて 河 草抄
 くとん谷の谷と云うもつひつぎて 且つはわきまやわきま
 の所と云ふ 花 源氏君の容儀才能心操と云う
 こそ立つと云ふ人のゆき珠の中よりつひつぎて 也
 へつりるごとく心也と云うもつひつぎて 也 未と云うもつひつぎて 也
 子と云うもつひつぎて 也 未と云うもつひつぎて 也
 ありの山門と 細 冷泉院也 源氏の末と云う
 八徳密の事と云うもつひつぎて 也 未と云うもつひつぎて 也
 當代の三官 細 白官也

〇天やのまろ君 細 廿三官の腹董也

〇まろゆきまろ 細 抜群の人のあつぎて
 孟 源氏のあつぎて ちちちと云うもつひつぎて 也
 人也二段と云うもつひつぎて 也

ひろくろれ 花 光原氏 院は院は隱居して居て
 二三年後終は昇霞と云うもつひつぎて 河 草抄
 くとん谷の谷と云うもつひつぎて 且つはわきまやわきま
 の所と云ふ 花 源氏君の容儀才能心操と云う
 こそ立つと云ふ人のゆき珠の中よりつひつぎて 也
 へつりるごとく心也と云うもつひつぎて 也 未と云うもつひつぎて 也
 子と云うもつひつぎて 也 未と云うもつひつぎて 也
 ありの山門と 細 冷泉院也 源氏の末と云う
 八徳密の事と云うもつひつぎて 也 未と云うもつひつぎて 也
 當代の三官 細 白官也

菊のこころは白ひたるこころのわかれはなれど
 咲くはあつらひのこころにさされば下れ初はなれど
 菊のこころは白ひたるこころのわかれはなれど
 咲くはあつらひのこころにさされば下れ初はなれど
 菊のこころは白ひたるこころのわかれはなれど
 咲くはあつらひのこころにさされば下れ初はなれど

○とくさくさくさ 或抄 世よは好色人といふ

○源中將 弄董也 白宮(ま)り好也

菊のこころは白ひたるこころのわかれはなれど
 咲くはあつらひのこころにさされば下れ初はなれど
 菊のこころは白ひたるこころのわかれはなれど
 咲くはあつらひのこころにさされば下れ初はなれど
 菊のこころは白ひたるこころのわかれはなれど
 咲くはあつらひのこころにさされば下れ初はなれど

○河 若共

○やうしんご 細やんしんご也

○乃やいほくよ 万水白宮(ま)り好色人といふ
 實は心とあつらひのこころにさされば下れ初はなれど
 菊のこころは白ひたるこころのわかれはなれど
 咲くはあつらひのこころにさされば下れ初はなれど

菊のこころは白ひたるこころのわかれはなれど
 咲くはあつらひのこころにさされば下れ初はなれど
 菊のこころは白ひたるこころのわかれはなれど
 咲くはあつらひのこころにさされば下れ初はなれど
 菊のこころは白ひたるこころのわかれはなれど
 咲くはあつらひのこころにさされば下れ初はなれど

○人々ハ 河 凡俗 日本紀

○身と心ハ 或釈 出家の心ニ 不絶也

○心と身ハ 孟 董の心ニ 不絶也

○心と身ハ 細 柏木の心ニ 不絶也

○三宮の 孟 白官也

もろあしはらむらひんていむすま
のれりてかしまんてかま
りあむいさむいんてあむえ
まてあしはらむらひんて
よはかまむらひんて
てあむいさむいんてあむえ
らりよまむらひんてあむ
まむいさむいんてあむえ
のれりてかしまんてかま
りあむいさむいんてあむえ
まてあしはらむらひんて
よはかまむらひんて
てあむいさむいんてあむえ
らりよまむらひんてあむ

○心と身ハ 弄 董の心ニ 不絶也

○心と身ハ 或釈 董の心ニ 不絶也

○心と身ハ 巴 董の心ニ 不絶也

わたりあむいさむいんてあむ
らりよまむらひんてあむ
まむいさむいんてあむえ
のれりてかしまんてかま
りあむいさむいんてあむえ
まてあしはらむらひんて
よはかまむらひんて
てあむいさむいんてあむえ
らりよまむらひんてあむ
まむいさむいんてあむえ
のれりてかしまんてかま
りあむいさむいんてあむえ
まてあしはらむらひんて
よはかまむらひんて
てあむいさむいんてあむえ
らりよまむらひんてあむ



